

特定非営利活動法人 太平洋戦史館

戦史館だより

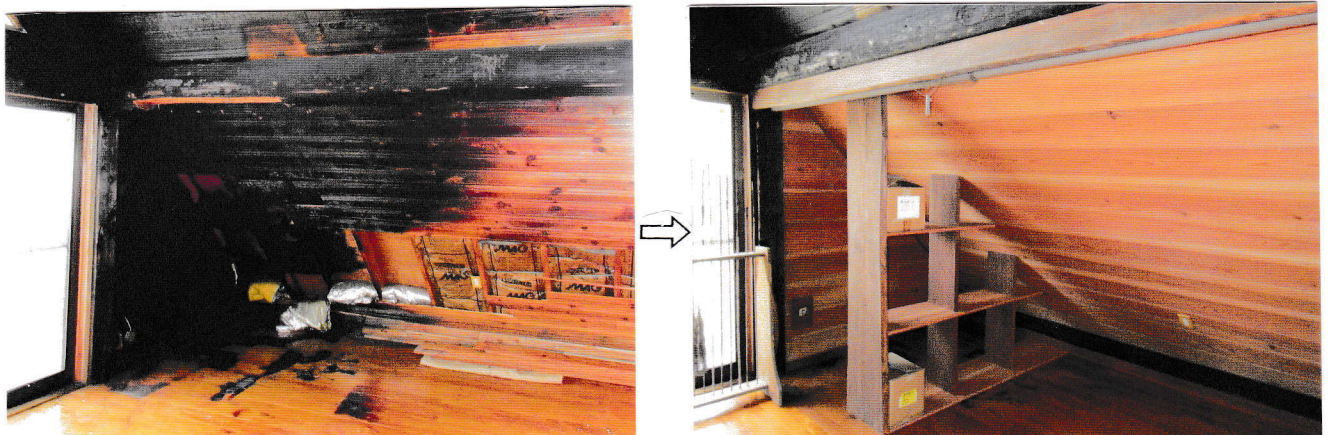
2023年6月10日発行
 戦史館事務局〒029-4427
 岩手県奥州市衣川陣場下
 41番地 蟹オフィス花岡
 編集発行人 花岡千賀子

会長理事 岩渕 宣輝 事務局長 花岡千賀子 ☎0197-52-3000 FAX 0197-52-4575

戦史館会員の皆様、無事にお過ごしでしょうか？2023年の春から夏へ全国各地で地震が頻発し、気温の変動も激しくてとても身体が追いつけない。熱中症も要注意の季節です。全国各地のコロナが消滅した訳でなくても人が集まる機会は増えています。高齢者が混雑した街中へ出ることはためらうでしょうが、戦史館で1回に対応できる来館者は1家族、あるいは1グループ単位の『事前予約制』なので狭い室内に密集することはありません。リニューアルした戦史館へご家族お仲間と一緒に出かけください。

今回のリニューアルは3階から

戦史館入り口は2階、展示室は階段を降りて1階なので、3階まで上がった方はいないと思いますが、実は3階南東の角は（写真左）焼け焦げたままの状態でした。火災が起きたのは1991年、建物が完成して引き渡される直前でした。消火作業で水浸しになった1階と2階は何とか修復できたものの、火元となった3階の修復までは、とても手が回らなかったことから、手つかずのまま不要になった物がどんどん山積みになっていきました。



「戦史館の資料と展示品、建物を公的機関に寄贈することで次の世代に活動を繋げたい」という決意を、繰り返しこの紙面でも書いているのですが、今も寄贈先がみつからない。それでも3階がゴミ屋敷ではいけない…と昨年末から『終活修繕』に取り掛かりました。写真右は焼け焦げ跡を修復し、常設展示から外した資料などを保管する収納庫に改装し、目隠し用にロールスクリーンも取り付けました。今まではニューギニアの民俗資料もすき間に展示していたのですが、お土産用工芸品ではない資料なので3階に移しました。

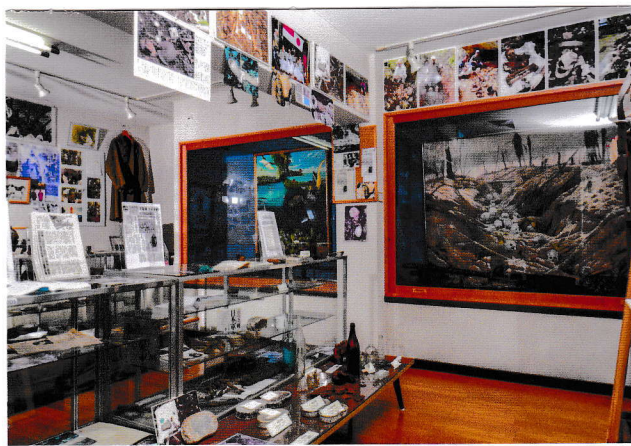
資料と書籍は2階の資料室に集中

今まで分散していた戦争に関する書籍や資料を1か所にまとめました。次頁の写真は戦史館会員の稲垣さんと岩渕会長理事。稲垣さんは16年ぶりの来館で、博物館学芸員という専門家として、展示について貴重なお話を伺いました。

稲垣さんの後ろの書棚に並んでいるフォルダーは、戦史館会員の小塚さんが、長年かけて整理編集をして、戦史館に寄贈してくれた戦域別の貴重なナマの資料です。一方で資料書籍を整理しているとき、中身が切り取られて、表紙だけが残されている資料に出くわしました。会員の財産なので、資料室を利用するためのルールも作らなければなりません。



1 階の展示室



展示している資料は戦時中に実際に戦地で使われていた物や遺留品です。“最重要一級資料”なので短い解説文をつけて一層リアルにわかりやすく伝えたい…中学生が観て馴染みやすいように…戦史館の理念が伝わるように…展示を観た人が、哀しみや怒り、憤り、その気持ちを大切にできるように。

ニューギニア戦域の遺留品、持ち主が見つかって遺族のもとに届けたいと始めた展示ですが、いつの間にかあれもこれも伝えたいという気持ちばかりが先行して、観る人のこと

を忘れていたかもしれません。たとえば靖國参拝問題に関連する資料は、じっくり考察できるように2階のホールに引越しました。戦争はまだ終わっていないし今も続いていることを理解してほしい…アジア近隣諸国との交流を目指す展示にしたい…。また盛り込み過ぎてしまいそうなりニューアルです。

3月6日 パプア州へ現地調査に出発するはずだったのですが… × に

遺骨帰還に向けたインドネシアパプア州への派遣活動は、2020年1月に厚労省の担当者とジャカルタの日本大使館職員による『周知派遣』が行われ、ビアクの住民へ説明会が開かれました。その会場で、日本からの経済協力が無いことに住民の不満が爆発した事件の詳細は戦史館だより 119号 124号に記載した通りですが、遺骨帰還への第一段階でつまづいたままコロナ中、外交交渉は進展しなかったようです。戦史館は推進協会と共に、コロナ後の活動を見据え、住民説明会で出された「岩淵は車をくれると言ったのに嘘つきだ」という発言が事実無根であったという謝罪文を受け取り、大使館まで伝えていました。

あれから3年、コロナ後の渡航が可能になったことで、第2段階『調査派遣』がいよいよ始まる！ 推進協会として、戦史館岩淵も漸く現地へ出発できる！ と期待しました。この調査派遣の後にはジャカルタでDNA鑑定→教育文化省による考古学調査→遺骨帰還応急派遣→日本兵遺骨の帰還へ…長い長～い道のりに向けて。

『調査派遣』出発前日、5日夕方、厚労省からの突然の電話は「岩淵さんは行けない」というもので理由は不明。この調査は推進協会から団長の山岸さん（厚労省で長年遺骨帰

還を担当)と岩淵、厚労省職員、遺骨鑑定専門員、日本大使館、合計8名。パプア州スピオリ方面で3月6日から18日までの行程が予定されていました。

厚労省事業推進室長は「岩淵さんには辛抱して頂きたい」。出発前の他の団員を前に、「大使館の表敬時に、岩淵さんが不参加になった理由を、大使に直接尋ねることがないように。7年ぶりとなる達成に集中してほしい」と念押しして送り出したようです。

4月26日、岩淵会長と花岡事務局長が外務省南東アジア二課を訪問。岩淵が調査派遣から外された経緯を尋ねました。2月22日インドネシア教育文化省から岩淵を除外すれば他の団員の渡航は可能と言われ、外務省は直前まで交渉を続けたようです。岩淵を名指して拒否したのは3年前の周知活動に同行した教育文化省の2名。当時の厚労省の報告書には「高齢者は来ないで技術者だけにしてほしい」と教育文化省の発言が記載されています。岩淵の参加を拒む理由を「岩淵がコミュニティの不特定多数とトラブルになっている」としているのですが、いつ?どこで?誰と?どのようなトラブルなのか?誰も知らないので調査が必要です。遺骨を持ち帰ってしまうと日本人が来なくなるので遺骨収容はやめてほしいという人も多数います。戦後賠償が何もないパプアでは、岩淵が日本政府の代わりに住民に囲まれて様々な要求を突きつけられることはよくありました。中央政府に訴える場として住民説明会が使われて不満や要求を爆発させても不思議はない。現地に関わりたくない教育文化省にとって、岩淵はヤッカイモノなのかもしれません。

外務省南東アジア第二課長は「実際にどのようなトラブルなのか何も出されていないので、機会をとらえて教育文化省から本音を聞き出すので時間をください」と問題の解明を約束してくれましたが、はたして「来ないでほしい」と言われている高齢者が生きているうちに、問題が解決できて名誉を回復できるのかどうか微妙です。

アイブラボンディ島の遺骸は同行の遺骨鑑定専門員により「島民の骨」と断定!?

同島の古井戸から白骨遺骸が発見されたのが2014年、この時点では島民か日本兵か不明でした。この島は無人島で、戦後入植が始まり、部族長のお父さんを中心に、砂浜に流れついた日本兵の遺骸を一か所に集めたことなどの証言が得られていました。翌2015年3月の再調査で牧師、村長や部族長らも立ち会って死者への祈りを捧げ、島民総出で遺骸を掘り出す作業に協力戴きました。井戸の中から40数体が運び出され、新たに仮安置所を作り10月の遺骨帰還で日本に戻るだろうと期待していました。あれから8年。

今回の調査派遣に岩淵は参加できなかったのも、日本の遺骨鑑定専門員に詳細を尋ねることもできません。DNA鑑定も不要、団長の山岸さんが下船時に足を滑らせて4針を縫うケガをしたことで、現場を把握できる状態になく、残された遺骸の今後のことも不明なまま、スピオリ方面は幕引きとなってしまいました。

このあたりは台湾から千人規模の「台湾特設勤労団」2部隊が配属されたという記録があるので、その部隊の可能性はないのかどうか。「現地人の骨」という鑑定に、もし40名以上の現地人がまとまって古井戸に投げ込まれる事態とはどのようなものか。これまで共に活動してきた推進協会の山岸さんは6月末で退職されるそうです。戦没者遺骨収集推進法は実施期間は2024年までとされていましたが、5年の延長が決まりました。今後、パプア州だけでなく、西パプア州の遺骸調査の予定もあるようなので見守っています。